

生涯学習という点、公民館やカルチャースクールを思い浮かべる方も多いでしょう。しかし、広く暮らしの中にある学びを生涯学習として考えると、保健・医療・福祉分野とも密接に関わるものだとわかります。

第1に、自身の生活や健康に関する学びがあります。保健・医療・福祉の専門職者は、患者や当事者、利用者「意識を変える」ことを求めることがあります。「塩分の取り過ぎに気をつけましょう」「障がいを受け入れよう」「障がいを乗り越えよう」「仕事を就かないと自立できませんよ」など。しかし、患者や利用者は、白衣を着た人を見ると緊張したり、問題を指摘されると「そんなことわかってる」と言い訳をしたりします。

識が揺さぶられ行動が変わることにつながるにくいのです。

患者や当事者が、自分が解決すべき問題を発見し、なぜそうなっているのか、どうすればいいのかわからない」と思うことが、問題解決につながる学びのスタートになります。その際、

私たちの日頃の感情、例えば不安や悩みを語り、同じ立場の人や支援者と共有しあうことが有効です。悩んでいるのは自分だけではないことや、自覚していなかった問題に気づくことができる「話し合い学習」は、社会教育・生涯学習の分野でも重視されてきた学習方法です。

第2に、病気や障がいなどへの理解をすすめる学びです。「認知症になっても安心して暮らせるまちづくり」を掲げる福岡県大牟田市では、小・中学生の子どもたちが認知症への理解を深め、

徘徊するお年寄りを探す模擬訓練にも参加しています。

認知症による、いわゆる問題行動だけに注目し「困った存在」と見るのではなく、「その人らしさ」を大切にするとという視点を子どもたちから家族、地域へ広めていこうという試みです。

今の社会は、アメリカでも日本でもそうであるように、多様な人々がいることを価値のあることとして受けとめるのが、少数者を排除することで社会の結束を高めようとするのが、対立点の1つになっているように見えます。誰もが暮らしやすい社会をつくろうとするとき、多様な立場の人々とお互いを理解しあうための学びが不可欠になります。

第3に、保健・医療・福祉の専門職者が力量形成をすすめるための学びがあります。本学を卒業する学生の多くは、何らかの専門の資格を

もって社会に巣立って行きますが、おそらく本学のどの先生も、資格取得はゴールではなくスタートだと学生たちに語りかけているはずです。

専門職者が、日々新しくなる情報や技術を吸収し、社会や人間をより深く理解しようとするなら、生涯を通して学び続ける姿勢を身につけ、学びのための機会や場を持つことが必要です。大事なものは、そうした生涯を通して学びを個人的な過程にしないことです。

さまざまな患者の会や当事者の会で、同じ立場にある人たちが不安や悩み、喜びを語りあい、悩んでいるのは自分だけではないと気づき、問題解決の方向を見いだそうとしています。同じように専門職者も悩みや喜びを語りあいながら、お互いを高めあうことができます。学びあうコミュニケーション」を持つことが求められています。



新図書館オープンへ

現在、新図書館の建物がほぼ完成し、4月4日(火)のオープンに向けて備品の整備や図書引越しの準備を進めています。

新図書館は各階ごとに、1階は学生たちが活発にディスカッションなどが行えるよう「活発な空間」を、3階は集中して閲覧や勉強ができる「静寂空間」を、そして2階はその両方を備えた「活発+静寂空間」をコンセプトに設計されています。

◆問い合わせ 名寄市立大学 ☎01654②4194



新図書館外観



1階「活発な空間」



2階「活発+静寂空間」



3階「静寂空間」